

712 711 710 709 708 707 706 705 704 703 702 701
612 611 610 609 608 607 606 605 604 603 602 601
512 511 510 509 508 507 506 505 504 503 502 501
412 411 410 409 408 407 406 405 404 403 402 401
312 311 310 309 308 307 306 305 304 303 302 301
212 211 210 209 208 207 206 205 204 203 202 201
112 111 110 109 108 107 106 105 104 103 102 101

所在地 目黒区東山2の16

ミドルに変わる自分、ミドルが変える社会

時代の転機をミドルの好機に

人生の転機ともいえる40代にさしかかった現ミドル世代。日本社会も大きな転換期を迎えている。同期した2つの転機から、明日の自律社会を望めるだろうか。

HRI社会研究部 部長 中間真一

いつからが
ミドルなのか

HRIが今回実施したアンケート調査の、「あなたは自分がミドル、中年であると感じていますか」という質問に対する各年齢別の結果は、30代後半では10〜25%程度の自覚率であるのに対し、39歳、40歳と上昇し、41歳で過半数を超える。その後徐々に増加しながら、50代で80%まで上昇する。また、生き方の優先順位を問うと、30代後半では「遊ぶ」、40代となると前後半共に「働く」を最優先させる人が最も多い。また、生理的な面から見ても40歳という年齢は転換期であるという。やはり、40代の人口は、意識の変化点だ。

もう一つ、心理学者ユングをまねて、人生を日の出から日の入りまでの太陽の動きに例え、自分のポジションをどこに位置づけるかを問うた。この結果、ミドルの自覚の有無にかかわらず、過半数(59%)は「正午(南中)を過ぎた太陽の位置を選択していた。人生のピークをすでに過ぎたという意識が明らかだ。ちなみに、同時期に同じ質問をしたスウェーデンのミドルの結果は、67.8%が正午以前の太陽の位置を選択していた。この差には愕然としたが、比較の論考は別の機会に譲ることとする。



生まれも育ちも テレビとともに

本年2月1日は、テレビ放送開始50周年記念日であった。今回対象としているミドル世代は、家の中心にテレビがある生活の中に生まれ、テレビを「社会の窓」であり「娯楽の舞台」として育った第一世代といえる。安定的に成長経済が続き、これといった社会混乱もない中、この世代の折り目節目の共通体験は、テレビ視聴を通じたものが多い。各家庭や学校のテレビ画面を通して、大多数の人々が同一情報を受け取って育ってきたミドル世代は、テレビ番組やアイドル歌手の歌謡曲に重ねて、ライフヒストリーが書ける世代といえる。

たとえば、ミドル世代の幼児期、少年期

に共通する番組の一つに、NHKの「ひょうこりひょうたん島」がある。東京オリンピック開催年の昭和39年から43年までの5年間、平日夕食前の15分間の人形劇だが、視聴率40%台を何度も記録したほどの人気番組だ。もちろん、私もテレビにかじりついて見ていた一人で、その主題歌や挿入歌は、今でも完全に思い出して歌えるほど染みついている。

同世代ならご存知の通りのテーマソング、「波をちやぶちやぶちやぶちやぶかき分けて……丸い地球の水平線に、何かかきつと待っている……泣くのはいやだ笑つちゃおう、進め」。そして、ガバチョのテーマ、「今日がダメなら明日にしましよ、明日がダメなら明後日にしましよ、明後日がダメなら明々後日にしましよ、どこまで行っても明日がある」。当時みんなで歌っていたこの歌詞は、決して先送りのススメではない。社会はぼくらの希望をかなえるためにどんどん前に広がっていく、だから楽しく進もうという明るい時代のメッセージだった。そして、実際にケンケン成長する経済的な豊かさに押し上げられ、この世代は社会環境

に加速されて成長してきた。

作者の井上ひさし氏は、ある新聞記事で「自分たちが、わくわくしておもしろいと思えるかどうかで作品をつくった」と語っていた。これはまさに、当時から70年代へと続く、混乱や迷いの少ない、働くことと豊かさが競い合って進む、日本社会の楽天的な価値観を表現している。当時子どもであった現ミドル世代は、無意識のうちに豊かに変わりゆく社会を乗り物にして、まっすぐに進んでいた。人生も仕事も家庭も「おもしろい」明日があるから、泣くのはやめて笑つちゃえば、結果オーライだった。この気分は、良くも悪くも現ミドル世代の根底にある。

「ひょうこりひょうたん島」や「おぼけのQ太郎」「鉄腕アトム」「魔法使いサリー」「巨人の星」「アタックNo.1」に熱中した幼少年期、それらの画面には、将来への夢と期待が、ふんだんに盛り込まれていた。思春期には「おれは男だ!」、飛び出せ!青春、「われら青春!」、こうしたドラマやマンガは、男女の平等意識も強いが性別役割意識も強いという、ミドル世代の特徴にも影響を与えているようだ。

このように、文学作品などへの奥深い興味や、静かに批判的にもものごとを思索するの必要を感じず、テレビを通して流行に目を向け、仲間とともに、しかし自分も大事

に、もつと豊かな明日に向かって、エスカレーターに延々と乗り続けようという、楽天的でアクの少ない、調整的な世代価値観が形成されてきたのだろう。

団地が生んだ 都市化社会の個人主義

また、「団地生活」の中に生まれ育つた第一世代、「団地の世代」であることにも注目すべきだ。昭和30年、鳩山内閣の下、住宅建設5カ年計画に基づき日本住宅公団が設立された。そして、大規模な団地建設が都市周辺部で急速に進んだ。また、同時に多くの大企業は団地型の住宅を建設した。この団地や住宅というホモジニアスな空間の中で、中流意識を持つ核家族という都市型の新しいライフスタイルが生まれた。それは「団地族」としてあこがれの対象にもなった。この時代に幼少年期を過ごした都市部のミドル世代は、団地居住者かどうかにかかわらず、何らかの団地社会や団地環境の影響を受けている。みんな同じように豊かだという安心の意識、集団の中に適合しながらも、個人生活を楽しむという意識、これらの意識は強くなった。団地というライフスタイルは、都市部に限定された社会現象ではあるが、団地に象徴される社会の都市化が、最も急速に進

んだ時代であり、地方生活者であっても、都市化社会の価値観から少なからぬ影響を受けたはずだ。

このような背景に基づくミドル世代が、社会に出始めた頃の価値観変化を、上手く説明している論考に、少し古いが山崎正和氏の「柔らかな個人主義の誕生」(1984年、中央公論社)がある。まさに、経済成長の時代に生まれ育ち、ポスト・インダストリアル社会の到来とともに、その社会に出たミドル世代の価値観を説明している。この中で著者は、個人とは「変化の中の自己同一性」、個性とは「他人との共通性の中の特異性」であり、いずれも両義性を持つていると主張している。また、健全な個人主義は、集団主義と完全なアノミーとの中間に位置するのだと言う。集団への忠誠か、個人の尊厳かという二者択一ではないということだ。

このような論旨に適合する意識や価値観、行動が、今回実施したアンケート調査からも、数多く見出されている。すなわち、団塊の世代のように、躍起になって社会志向、家庭志向、会社志向など、組織志向を体現するのではなく、個人を中心に据えながら正直に社会に生きる態度である。自己犠牲に基づく生き方ではなく、自己本位に社会の中で生きようとする、ミドル世代ならではの指向性だ。

パソコン新人類の登場 情報社会のフロンティア

今回のアンケート調査は、ウェブ上の質問サイトを通じて実施した。ウェブによる調査は、回答者の偏りを招くとの批判もあるが、ミドル世代のインターネット利用率調査結果から、この方法の採用を判断した。総務省「通信利用動向調査」(2001年12月調査)によると、40代のインターネット利用率は59%と過半数を超えている。しかし、50歳代となると36.8%、60歳代は15.9%であり、50代以降は急激に利用率が下がるとともに、男女間の利用率の差も顕著となる。

思えば、NECのPC8000シリーズが現場に普及し始め、東芝のワープロPROの導入がOA化のシンボルだった時代に社会に出てきた、「マイコン・ワープロ第一世代」なのだ。専門家だけが大型コンピュータにアクセスした時代から、一人ひとりが自分のコンピュータを持つ時代への、大きな転換期を体験したミドル世代は、ITリテラシーの面でも、前の世代と大きな差異が認められるのは当然だろう。TV第一世代は、個人のメディアとしてのパソコンを、「社会・ネットワークの窓」、「娯楽の舞台」として容易に受け入れ、ネット社会へ飛び

移るアドバンテージを持っていた。アスキー創業者の西和彦氏(46)や、日本マイクロソフトの社長だった成毛真氏(47)など、パソコン時代を拓いた人たちがこの世代だったことは、偶然ではないだろう。

*

今回対象としている40代の世代はポスト団塊の世代として「しらけ世代」、「すき間世代」、「過渡期の世代」と呼ばれていた。また30代後半の世代は「新人類」、「おたく世代」などと称されてきた。確かに、この括りの世代は、団塊の世代と一線を画す違いが認められる。また、その下のバブル経済最盛期以降に社会に出てきた年代とも違う。良く言えば、個人と社会の間を上手く往来して愉快に生きる世代。悪く言えば、うわついた中途半端な骨も個性もない世代だ。この世代がミドル期に到達するとともに、社会も大きな転換期を迎えた。

意識調査がミドルの 生き方を考えるきっかけに

個別テーマの結果分析や考察は、各研究員の論考があるので、ここでは世代全般にかかわる結果のいくつかのポイントを、「生活の満足」や「自律した生き方」との関係から紹介する。

本アンケート調査結果は、全国各地域の



人口分布をもとにし、35歳から49歳まで、5歳区分で男女各150名、全900名の回答結果に基づく。考える時間を要する設問が多かったにもかかわらず、短期間で予想をはるかに超える回答が得られた。この事実も、ミドル期の一つの特徴のようだ。知人にも依頼したが、回答後に届いたコメントには、「忙しい中、いやでも最近不安を感じ始めていたのに、他人から聞かれてあれこれ答えるのなんかマッピラだ。」

と思いつつも、義理で答え始めた。プチンプチンと質問の選択肢をクリックしていくうちに、今の自分やこれからの自分を、本気で考えこんでしまったというものがあつた。他にも同様のコメントがあり、ミドル世代は、節目の現在を考えるためのきっかけを求めているが、その余裕も、明るい展望を持てる可能性も持ちにくい様子がかがえた。

女高男低。 意外に高い個人生活の満足度

調査では、個人の生活、家庭生活、仕事の生活の3生活領域に分けて、今の生活の満足度を尋ねた。満足している(満足十どころかという満足)人の比率は、個人生活では71.4%、家庭生活は70.8%と、私の予想以上に高かった。しかし、仕事生活

では44.3%と過半数に満たない。また、どの生活満足度も「女高男低」である(1%有意)。今の世の中は、やはり女性が元氣な社会だ。一方、わずかな差ではあるが、個人生活の満足度が3領域の中で最も高く、これには、30代後半、40代前半の女性の回答結果が大きく寄与していることが興味深い。ミドル女性は、個人生活の満足度を重視している。

個人生活の満足度について5歳区分ごとの結果を見ると、40代前半が、前後の年代に比べて、男女共に高い満足度を示していた。この年齢層は、回答者の80%が既婚で家庭を持ち、76%は子どももいる家庭であり、末子が小学校(45.4%)か未就学児(28.4%)である。そして、この年代こそ、ミドル(中年)を自覚し始め、家庭生活や夫婦生活の問題がふくらみ始める年代なのだ。そのような中で、74.7%が個人生活に満足しているとは、どう解釈すべきなのだろう。

この原因について、インタビュー調査から感じたことがある。この年代の何人かが、子どもや妻との距離が最近広がっていることを肯定的にとらえていた。妻も子どもも、基本的にはそれぞれ個人なのだから、私も一人の個人として、家族のことはかりでなく、自分の生き方や仕事のことを考えたい。家族と仕事だけの生活ではない



なっている。

現在の日本では、就業者の79.7%（平成14年度、労働力調査）が雇用者、すなわちサラリーマンであり、その妻は専業主婦が多い。この典型的構成による夫婦がミドル期に入り、「個人」の生き方として、男は我慢、女は浪漫の生き方に進み始めるという見方ができる。良くも悪くも、「自分」というものを意識して育ってきた現ミドル世代だからこそ、「個人生活」から考える生き方が顕在化してくる。

ゆとりのある生き方が 個人生活の満足へ

少なくとも、50代以上の世代と比べて、個人という立場を意識しているところに、現ミドル世代の特徴の一つがある。それは、個人を意識したミドル世代は、どのような生き方によつて、その満足を獲得しているのだろうか。

アンケート調査結果をもとに、個人生活の満足度と相関の高い要因を探すと、「仕事生活の満足度が高い」、「気持ちのゆとりを感じている」、「10年後の生活への不安が少ない」、「自分に対して正直な生き方をしている」、「自分の夢が実現に近い」、「自律した生き方をしている」などが、設問項目の中から抽出された。

家計調査などから明らかかなようにミドル世代一般には、ゆとりの自覚は低い。しかし、「気持ち」のゆとり獲得は、生き方によつて可能なのだ。そこに、ミドル世代の生活満足度の高低を判別する重要なポイントもある。今回の調査でも、気持ちのゆとりがある（ゆとりに感じる）とどちらかというとゆとりに感じる」と回答した人は、男性で36%、女性で46.9%と、過半数には達しないものの、経済的なゆとりに感じている人の比率よりも高い。それでは、この「気持ち」のゆとりを持てる生き方とは、どのような生き方であろう。調査結果に基づき相関分析をしてみると、「自分の夢を持ち」、「自分に正直に生き」、「その夢が実現に近い」と実感を持てる生き方であり、「自律した生き方」と結果が出てくる。これは、興味深い分析結果だ。

ミドル世代にとつて 自律した生き方とは？

今回の質問の中に、「自分の生き方は、自律した生き方だと思いますか」と、自律的な生き方に関する自己評価の問いを設けた。これにより、「自律した生き方」を自認するミドル世代の人々の価値観や意識の特徴を探ろうとした。この結果、「自分に正直な生き方」、「夢が実現に向かってい

と話していた。このように、家庭や仕事に対して個人という立場を主張することは、昨年のシニア世代の調査では、見られなかったことだ。

一方、この年代の女性では、子育てのブライムタイムから解放されつつある、自分を取り戻せるミドルという意識がうかがわれた。これは、ミドルの転機が、女性と男性とは逆向きに作用することを物語っている。もちろん、身体の変化や衰え、人生の後半への移行という意味では同じ方向である。しかし、女性が、個人である自分を取り戻せる転機になるのに対して、男性の場合、マネジャーへの昇格等により、自分を抑える我慢の生き方への転機と